



ニッポン ドクター和の 臨終図巻

よつや、長尾先生の念願かないましたね。最近、そんなふうに声をかけられます。何のことかといえ、新型コロナウイルスの感染症法の位置付けが、今年5月8日から「5類」になるという話。

僕はおそらく日本で最初に新型コロナウイルスを「2類相当」から「5類」に変更せよと提言した医者です。2020年の春からです。だから良かったですねといわれたところ、どうでしょう。やっと今？遅すぎぬ。もはや「5類」でもないよ、という感想しかありません。そして、2類と5類に関係なくコロナ前の暮らしを早く取り戻すこと考える医療者もよつやへ増えてきました。

ほんの1年ほど前まで、家族さえ最期に立ち会えないなど非情なルールを設けている病院がありました。今、今は少しづつ立ち会えるように(在宅でのお看取りでは)

295

落語家 笑福亭笑瓶



大好きな師匠と「最期のお別れ」

長尾和宏(ながお・かずひろ) 医学博士。東京医大卒業後、大阪大第二内科入局。1995年、兵庫県尼崎市で長尾クリニックを開業。外来診療から在宅医療まで「人を診る」総合診療を目指す。この連載が『平成臨終図巻』として単行本化され、好評発売中。関西国際大学客員教授。

んなルールはありません。あくまで病院の話)。この人の訃報の記事を読み、あらためてそんな感想を持ちました。
落語家でテレビ番組でも長年活躍されていた笑福亭笑瓶さんが2月22日に亡くなりました。享年66。死因は急性大動脈解離との発

表です。笑瓶さんは2015年12月にもゴルフ中に大動脈解離を発症しドクターヘリで緊急搬送。奇跡的に一命を取り留めていました。しかし今回、奇跡は起きられなかった。

寒い季節、急激な気温の変化によるヒートショックで急性大動脈解離など、心臓突然死で亡くなる人は多いです。しかし今年には異常に多い。50代、40代でも突然死された人の話をよく聞きます。たとえば2月25日の読売新聞オンラインには「再開の市民マラソン、ランナーの心肺停止相次ぐ」という

心の準備できない「突然死」

記事がありました。おそろしく本人は、死の予兆を感じぬままに旅立っていることでしょう。身体的苦痛も長くは続かないはず。しかし家族や知人が心の準備が全くできないのが、突然死というもの。せめてもの救いは先に述べたように、ようやくここに来て最期のお別れが病院でも徐々に再開されるようになったこと。師匠の笑福亭鶴瓶さんが、こんなふうにお話しされていました。

「最期、本人に会えたからね。意識はなかったけど、体はまだ温かかった。死んだことは分かってないと思うけど、僕が来たことは感じ取るものはあったと思う」。さすがは鶴瓶さんです。人間のもつ五感のうち、最期まで保たれるのが聴覚であることが分かっています。リモートではなく直接会って、最後のぬくもりに触れて声をかけてあげたい。笑瓶さんが大好きな人と直接触れ合えて旅立られたことに少しだけ安堵(あんど)しています。